

子どもの表現を導く支援ができる保育者養成に 関する実践的研究 (1)

岡田 知也 ・ 桐山 由香*
(音楽教育) (梅花女子大学)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*567-8578 大阪府茨木市宿久庄2-19-5 梅花女子大学

A Practical Study about Education Program of Childcare Worker, Can Bring Out The Children's Expression.

Tomoya Okada and Yuka Kiriya*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

Faculty of Psychology and Children's Studies, Baika Women's University 2-19-5, Shukunoshō, Ibarakishi, 567-8578

要 旨 本研究は、1) 子どもの表現活動を導くことができる保育者を養成するために、音楽に関する授業科目において育てるべき資質・能力について考察し、2) そのことを保証する授業内容を再構築し、3) 授業内容が適正であるかどうかについて検証を試みることである。長島の「授業力評価スタンダード(音楽科)」を応用することにより検証したところ、再構築した授業内容については、概ね適正であるとの結果を得ることができた。

キーワード 保育者養成 資質・能力 幼児 表現 音楽

I. はじめに

文部科学省は、次期学習指導要領の改正について、本年度秋に中央教育審議会(以後、中教審)において諮問を行い、中教審は2016(平成28)年度中に答申を行う予定であるとしている。検討の方向性として、幼稚園教育要領を含む全学校種の学習指導要領全体について検討することが挙げられており、また学習指導要領全体の構造について、「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使って何ができるようになるか」という観点から、育成すべき資質・能力を明確化した上で、教科・科目の在り方や見直しを行う、としている。そのことに基

づき、具体的な検討予定項目の一つとして「子どもの発達の早期化等を踏まえた、幼小接続の観点からの幼児教育の見直し」が挙げられている。

振り返れば、2006(同18)年7月の第55回中央教育審議会における「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」では、1) 大学での教員養成を通して「教員として最小限必要な資質能力」を確実に身につけさせるようにし、2) 教員免許状を教員として最小限必要な資質能力を確実に保証するものに改革していくことが求められた。また、本年7月9日に開催された第87回教員養成部会においては「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上につ

いて(中間まとめ)」について協議が行われ、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成のためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善に加え、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが必要であるとの認識のもと、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の充実や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある」ことや「幼小接続をはじめとした学校間連携等への対応が課題となる」ことが明示された。これら一連の教員養成改革の動きについて、筆者は一層注視していかなければならないと考えている。

これらをうけて、教員や保育者をめざす学生たちが、これまで以上に高い資質・能力と最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていくことができるよう、授業担当教員としてどのような質的側面を向上させていくのかを学生自身が把握できるよう可視化し、免許法で定められた授業科目において養成する資質・能力を、明確にすることが重要であると考え、研究を継続し、成果を発表してきた。

本研究の目的は、具体的には1)子どもの表現活動を導くことができる保育者を養成するために、音楽に関する授業科目において育てるべき資質・能力について考察し、2)そのことを保証する授業内容を再構築し、3)授業内容が適正であるかどうかについて検証を試みることである。

今年度、岡田は保育者養成における音楽に関する授業科目である「幼児音楽」について、その授業内容を検討した後、再構築を試み実践を行ったのであるが、その内容は幼稚園教諭免許状を取得するための授業科目として適正なものであったのだろうか、また学生たちの音楽に関する資質・能力を高めることができたのであろうか。本発表においては、実践後のアンケート調査等により、とりわけ以下の2点について明らかにしていきたいと考えている。

1. 「幼児音楽」の授業内容において育てることができる、音楽に関する資質・能力はどのようなものか。

2. 「幼児音楽」の授業内容は、幼稚園教諭免許状・保育士資格を取得するための授業科目として適正なものであるのか。

Ⅱ. 子どもの表現を導く支援とは

では、本研究における子どもの表現を導く支援とどのようなものであるのか。長島(2009)は「授業力評価スタンダード(音楽科)」(文末の資料1参照)において、実践力をA.授業構想力、B.授業展開力、C.授業評価力という3つの力に分類して述べている。本研究では実際の保育の実践の撮影記録から、保育に必要な保育者の音楽に関する資質や能力について、子どもへの言葉がけや表情、視線等の分析を行った。(2015(平成27)年6月9日大阪府B幼稚園5歳児クラスにおいて桐山が撮影)

【場面1：大学4年生の実習生による歌唱指導】

T1：元気に歌ってなあ。 できる？

C2：できる！

T3：できる人？ はい(片手をあげる)

C4：はい(手をあげる)



C5：はい(手をあげる)

C6：お当番さんは？

担任7：お当番さん、後でいいよ？

T8：お当番さん、後でいいよ？

(T：担任をみる。ピアノのいすに座る)

T9：元気に歌おうな。 いい？

C10：できるかなあ？

T11：うん

(T：ピアノで前奏を弾き始める)

(C：パラパラと数人が立とうとする)

担任12：立ってない。立ってない。みな立ってない。

(T：担任をみる。照れ笑いをする)

T13：ごめんね。ごめんね。

T14：立とうね。歌うときは立とうね。

(C：立ち始める。)

C15：アッ。 まだまだ。

T16：立てる？大丈夫？

(T：前奏を弾きだす)

(T：少しミスタッチをする)

(C：ピアノのそばの子どもが覗き込む)



(C：歌い始める)

(T：「お花もニコニコ…」のあたりからピアノ伴奏がつまずき始める)

(C：歌い続ける)

(T：「おはよう。おはよう。」の部分では完全に伴奏が止まる)

(C：笑う)

T17：ごめんね。

(T：片手をあげ、子どもの方を見て苦笑。
ひたすらピアノに向かい2番を弾き始める)

(C：2番歌い始める)



(T：2番の最初は順調に行くが、「小鳥もチッチと」から伴奏が止まりがちに)

(C：1番と2番の歌詞がまじる。笑う)



C18：えー。

C19：大丈夫？

C2：あーあー。(口々にしゃべる)

T21：3番ね。(3本指をたてて、3と示す)

(T：ひたすらピアノに向かう。3番を続けて弾く)

(C：3番を歌う。口に手を当てて笑ったり、手を叩いて笑ったりする姿が見られる)



(T：少しテンポを落として最後まで伴奏する)

(C：伴奏に合わせて最後まで歌う)

C21：先生(担任に呼びかける)

C22：誰か2番と…（2番の歌詞が間違えていたことを伝えようとする）

T23：もう一回歌える？

C24：歌えるよ。

T25：もう一回歌える？

C26：えー。

T27：もう一回歌える？

C28：♪せんせいおはよう♪

T29：もう一回1番から歌おう。（1本指を立てる）



C30：誰かお花もチッチと…（1番の歌詞と2番の歌詞が混ざっていることを指摘する）

T31：立てるかなあ？

C32：えー。

T33：ごめんね。

（T：前奏を弾きだす）

（C：パラパラと立ち始める）

（T：ピアノを弾きながら、時々鍵盤から目を離し、子どもの方に視線を投げかける）



（C：1番から3番まで集中して、身体を動かしながら歌う）

実習3日目の実習生の実践例では、最初のつ

まずきは、歌うときに立って歌うという指示をせずに前奏を弾き始めたことである（担任12の部分）。長島の2）言語的パフォーマンスの②基礎的な発話や③適切な説明が欠けていたためである。

次にT17において見られたように、歌の伴奏をうまく弾けなかったため子どもたちの歌唱がバラバラになったという状況は、1）音楽的パフォーマンスの③伴奏による支援が、歌唱においては重要な力であることを示唆しているといえる。また、C18での一回目の歌唱の2番で、歌詞が正確に歌えていなかったことに気づかず、C30で子どもが指摘しているにもかかわらず取り上げることなく続けて3番の歌唱の活動に入ったことは、3）子どもたちへの対応の④予想外の子どもの発言や音楽的表現への対応の力が不足していることが考えられる。

一方、2回目の歌唱では、止まらずに子どもの方へ顔をむけて伴奏をする姿が見られ、その結果、子どもたちも生き生きとして、集中して歌唱することができた。これは、1）音楽的パフォーマンスの②伴奏の力が発揮でき、3）子どもへの対応の②視線（アイコンタクト）を子どもに向けることができたからである。

今回の保育の場面の検証では、特に授業展開力の1．パフォーマンスの項目における、「音楽的パフォーマンス」「言語的パフォーマンス」「子どもへの対応」が重要であることを、あらためて見てとることができた。保育者を目指す学生にこれらの力を身に付けさせるためには、どのような授業を開発していけばいいのであろうか。次章以降において述べることとする。

Ⅲ. 「幼児音楽」の授業内容と育てることができる資質・能力について

（1）幼稚園教諭免許状の取得に必要な音楽に関する授業科目

1）「幼児音楽」について

香川大学教育学部学校教育教員養成課程では、「幼児音楽」と「保育内容の指導法（幼児音楽）」（以後、保育内容の指導法）を開設して

いる。

「幼児音楽」は、幼稚園教諭免許状及び保育士資格取得に必要となる、いわゆる教科専門科目である。半期2単位の科目で、学生は3年次前期に受講することとなっている。幼児教育コース以外の学生は、小学校教諭免許状のための必修科目である「初等音楽」で代替することができるため「幼児音楽」は受講しない。したがって、本授業の受講者は10名である。なお、幼児教育コースの入試にはピアノ実技を課していないため、受講者にはピアノを習った経験をもつものもいれば、全く経験がないものもいる。調べたところ、本年度の受講者10名のうち、経験あり7名、経験なし3名であった。経験年数を見ると、3年未満1名、3～9年3名、10年以上3名であった。ただし、いつまで習っていたかを見ると、小学校まで1名、中学校まで4名、高等学校まで2名となっており、本授業を受講する時点で習っているものは0名であった。経験者といえども、全員が数年以上のブランクがある状況である。

授業内容は、幼児の音楽に関わる表現活動を支援するために必要な知識・技能について講義や演習を行っている。詳細は次節において述べることとする。ちなみに「初等音楽」の授業内容は、ピアノ実技と小学校音楽科歌唱共通教材の弾き歌い及び一般的な楽典である。

本研究においては、まず本授業「幼児音楽」について、育てるべき資質・能力についての考察及び授業内容の検証を行いたいと考えている。

2)「保育内容の指導法」について

「保育内容の指導法」はいわゆる教育法科目であり、幼稚園教諭免許状を取得するために必修である。半期2単位の科目で、学生は主に3年次後期に受講することとなっている。幼稚園教諭免許状の取得を目指す学生は全員が受講するため、受講者は30～40名程度となる。

授業内容は、幼児の音楽に関わる表現活動や、保育施設における音楽を活用した行事等を実践するために必要な資質・能力を身に付けるための講義や演習を行っている。

そして、先述した内容に加え、さらに本研究において研究したい内容が、「幼児音楽」と「保育内容の指導法」において、資質・能力を保証するための授業の実践方法である。具体的には2点あり、1点目は、2011（同23）年10月に中教審が方向性として示した、教科専門科目と教育法科目を架橋する実践の構築である。このことについては、継続して研究が進められており、例えば三村（2013）はこの理念に基づき研究開発した教職実践演習の内容に関して提言を行っている。2点目は、育成すべき資質・能力を育むための課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び、いわゆるアクティブ・ラーニングによる学生たちの学びの場を構築することである。ただ、この“教科専門科目と教育法科目を架橋する実践の構築”と“アクティブ・ラーニングによる学生たちの学びの場の構築”については、時間の都合上、今後、段階的に成果を発表したいと考えている。そこで第一段階として本発表においては、本年度の「幼児音楽」の実践を行い、授業終了時の授業力評価スタンダード(音楽科)による自己評価及びワークシートの記述により、先述の2点について明らかにしていきたいと考えている。

(2)「幼児音楽」における授業内容の再構築

教科専門科目である「幼児音楽」は、岡田が2014（同26）年から新たに担当することとなった授業科目である。昨年度は、前年度の授業内容をほぼ踏襲して『バイエルピアノ教則本』を用いたピアノ実技と『こどものうた200』を用いた弾き歌い実技を行った。

そして本年度の実施にあたっては内容の再構築を行い、半期15コマの授業内容を以下の通り設定した。全体を3部に区分し、ピアノ実技に関しては前述のような状況であったため、第1部においてピアノ、第2部において理論、第3部において歌唱・伴奏を学習するように構成した。また第1部と第3部では、各回の終わりに必ず模擬実践を行った。使用するテキストは、第2～5回は『うごきのためのリトミック百科ピアノ曲集』、第6～9回は『幼児の音楽教育

法 - 美しい歌声をめざして』、第10～15回は『こどものうた200』である。

- ◇第1回 ガイダンス
- ◇第2回 ピアノで動きを表現しましょう（ピアノ1）
- ◇第3回 ピアノで動きを表現しましょう（ピアノ2）
- ◇第4回 ピアノで動きを表現しましょう（ピアノ3）
- ◇第5回 ピアノで動きを表現しましょう（ピアノ4）
- ◇第6回 音程、音階、和音とコードネームについて（理論1）
- ◇第7回 音程、音階、和音とコードネームについて（理論2）
- ◇第8回 音程、音階、和音とコードネームについて（理論3）
- ◇第9回 コードネームを手がかりとして、あそび歌を伴奏しましょう（理論4）
- ◇第10回 弾き歌いをしましょう（歌唱・伴奏1）
- ◇第11回 弾き歌いをしましょう（歌唱・伴奏2）
- ◇第12回 弾き歌いをしましょう（歌唱・伴奏3）
- ◇第13回 弾き歌いをしましょう（歌唱・伴奏4）
- ◇第14回 弾き歌いをしましょう（歌唱・伴奏5）
- ◇第15回 弾き歌いをしましょう（歌唱・伴奏6）
及び総括

（3）「幼児音楽」で育てることができる資質・能力について

では、この授業内容は音楽に関するどのような資質・能力に関わることができるのであろうか。

先述したように、長島（2009）は、授業実践力は授業構想力（事前に子どもたちの学習の可能性を想定し、適切な音楽授業を準備する能力群）、授業展開力（授業構想力をふまえながら、授業実践の場で臨機に発揮される能力群）、授業評価力（自分の授業や他者の授業の成果と課題を明らかにする能力群）の3つの能力群から把握されると述べ、さらに授業構想力に10項目、授業展開力に21項目、授業評価力に2項

目、合計33項目の下位能力群で把握することができると述べ、授業力評価スタンダード（音楽科）を開発している。本スタンダードは、そもそも小学校や中学校の音楽を専門とする教員が獲得すべき資質・能力を想定して開発されたものであるが、金指（2009）が同スタンダードを引用するにあたり、“音楽教師”を「保育者」に置き換えて考えた」と述べているのと同様に、筆者もここに示された資質・能力を育成することが保育者養成にとって重要であると考え、これを拠りどころとして授業内容の再構築を試みることにしたのである。

このカテゴライズに基づくと、本授業科目全体は、授業構想力の「目標の分類と設定」「授業構成 1）教育内容の構成」「同 2）教材の選択・構成」「同 4）学習法・学習形態の選択・構成」及び授業展開力の「パフォーマンス 1）音楽的パフォーマンス」「同 2）言語的パフォーマンス」「同 3）子どもたちへの対応」及び「学習者への評価」に関わるものであると筆者は考えている。つまり授業構想力のカテゴリーにおいては10項目中4項目、授業展開力のカテゴリーにおいては21項目中17項目と、授業展開力に関わる資質・能力を中心として33項目中21項目の資質・能力の育成に寄与できるのではないかと考えているのである。

まず本授業内容が「音楽的パフォーマンス」に関わることは、異論の余地がないところであろう。長島は、「音楽的パフォーマンス」をさらに「範唱」「範奏」「伴奏」「身体表現や指揮」「アインザッツ（合図）」の5つの観点を設定している。そして各々の観点の到達目標として、一例を挙げると「範唱」では段階1「教材となり得る歌唱曲にふさわしい拍節法とディクション（歌詞の発音法）に基づいて、歌唱教材を範唱することかできる」、段階2「子どもたちの学習課題に適した範唱を工夫し、これによって子どもたちの探求活動を促すことができる」、段階3「子どもたちの学習課題に適した範唱を工夫し、これによって子どもたちの探求活動を促すことができると同時に、その吟味の方法と実際のスキルを他者に指導することができる」と

設定されている。本年度の受講者には、先述した21項目の資質・能力の全てにおいて、最低限、段階1の目標に到達してほしいと願い今年度の授業内容を設定した。それらの資質・能力を育てることができたかどうかについて、授業終了後、直ちに検証に取りかかった。また、導入したアクティブ・ラーニングを活用した授業形態が効果的であったかどうかについてもあわせて検証を行った。

Ⅳ.「幼児音楽」の授業内容の検証について

(1) 授業力スタンダード(音楽科)による検証

本発表において、明らかにしたいことの1点目は、「幼児音楽」において育てることができる、音楽に関する資質・能力はどのようなものか、であった。では先述した授業内容で、音楽に関する資質・能力を育てることができたのであろうか。

授業力評価スタンダード(音楽科)の各能力の達成を測るため、授業終了時、受講した10名の学生を対象に21項目について自己評価を実施したところ、次のような結果となった。(2015(同27)年7月22日実施、調査対象:幼児教育コース3年生)

A-2「目標の分類と設定」:段階1 10名、段階2 0名、段階3 0名、到達できず 0名

A-3-1)「教育内容の構成」:段階1 9名、段階2 0名、段階3 0名、到達できず 1名

A-3-2)「教材の選択・構成」:段階1 8名、段階2 1名、段階3 1名、到達できず 0名

A-3-4)「学習法・学習形態の選択・構成」:段階1 5名、段階2 4名、段階3 0名、到達できず 1名

B-1-1)①「音楽的パフォーマンス、範唱」:段階1 9名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-1)②「音楽的パフォーマンス、範奏」:

段階1 9名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-1)③「音楽的パフォーマンス、伴奏」:段階1 9名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-1)④「音楽的パフォーマンス、身体表現や指揮」:段階1 8名、段階2 2名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-1)⑤「音楽的パフォーマンス、インザッツ」:段階1 9名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-2)①「言語的パフォーマンス、基礎的な発話、演技性」:段階1 7名、段階2 3名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-2)②「言語的パフォーマンス、適切な語彙、説明、例話」:段階1 9名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-2)③「言語的パフォーマンス、歌詞の範読」:段階1 8名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 1名

B-1-2)④「言語的パフォーマンス、発問」:段階1 9名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-2)⑤「言語的パフォーマンス、指示」:段階1 8名、段階2 2名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-2)⑥「言語的パフォーマンス、司会、助言、応答」:段階1 8名、段階2 2名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-3)①「子どもたちへの対応、身体的ジェスチャー、表情」:段階1 5名、段階2 3名、段階3 0名、到達できず 2名

B-1-3)②「子どもたちへの対応、視線」:段階1 8名、段階2 1名、段階3 0名、到達できず 1名

B-1-3)③「子どもたちへの対応、教室内的での位置取り」:段階1 10名、段階2 0名、段階3 0名、到達できず 0名

B-1-3)④「子どもたちへの対応、予想外の子どもの発言や音楽的表現への対応」:段階1 9名、段階2 0名、段階3 0名、到達できず 1名

B-1-3) ⑤「子どもたちへの対応, ハプニングへの対応」: 段階1 8名, 段階2 0名, 段階3 0名, 到達できず 2名

B-3「学習者への評価」: 段階1 10名, 段階2 0名, 段階3 0名, 到達できず 0名

21項目のうち14項目において, 全ての学生が段階1以上に到達できたと自己評価している。あくまでも自己評価であるため過信は禁物であるが, 概ね満足できる結果となっている。特に「音楽的パフォーマンス」に関わる5項目の能力については, 全員が少なくとも段階1に到達できたと回答している。このことから, 教科専門科目である「幼児音楽」として, その最も重要な役割を果たすことができたと思われている。

また「到達できず」と自己評価した学生がいた7項目を見てみると, A-3-1)「教育内容の構成」が1名, A-3-4)「学習法・学習形態の選択・構成」が1名, B-1-2)③「言語的パフォーマンス, 歌詞の範読」が1名, B-1-3)①「子どもたちへの対応, 身体的ジェスチャー, 表情」が2名, B-1-3)②「子どもたちへの対応, 視線」が1名, B-1-3)④「子どもたちへの対応, 予想外の子どもの発言や音楽的表現への対応」が1名, B-1-3)⑤「子どもたちへの対応, ハプニングへの対応」が2名であった。7項目中「子どもたちへの対応」に関わる能力が4項目であり, このことは今後の課題としたい。

(2) ワークシートの記述による検証

明らかにしたいことの2点目は, 授業内容は, 幼稚園教諭免許状・保育士資格を取得するための授業科目として適正なものであるのか, であった。このことを検証するために, 3部で構成した授業の各部ごとに, その授業内容についてワークシートに感想を書き, また最終回には第3部の授業内容に加えて, 授業全体の感想を書かせた。

記述内容をKJ法により分類したところ, 10名から35個の記述を抽出することができ, 以下

のような結果が得られた。

○授業内容について

A. 「ピアノで動きを表現」について 肯定的 8, 否定的 0

B. 「音程, 音階, 和音とコードネームについて」について 肯定的 5, 否定的 0

C. 「弾き歌い」について 肯定的 3, 否定的 0

D. 内容が実践的である 肯定的 4, 否定的 0

○授業の実施方法やその他

E. グループによるアクティブ・ラーニングについて 肯定的 3, 否定的 0

F. マイクロ実践について 肯定的 5, 否定的 2

G. ピアノを練習する習慣について 肯定的 5, 否定的 0

サンプル数が少ないため妄信は禁物であるが, 3部で構成した各授業内容については, 全て肯定的な記述であった。また, 授業の実施方法については, 記述数は少なかったが, 特に今年度から実施したグループによるアクティブ・ラーニングについて3個の肯定的な記述が見られた。

V. おわりに

本発表において明らかにしたいことは次の2点であった。

1. 「幼児音楽」の授業内容において育てることができる, 音楽に関する資質・能力はどのようなものか。

2. 「幼児音楽」の授業内容は, 幼稚園教諭免許状・保育士資格を取得するための授業科目として適正なものであるのか。

1. については「Ⅲ. 「幼児音楽」の授業内容と育てることができる資質・能力について」において述べたとおり, 長島(2009)の「授業力評価スタンダード(音楽科)」による, “A. 授業構想力”の能力群である「目標の分類と設

定」「教育内容の構成」「教材の選択・構成」及び「学習法・学習形態の選択・構成」の4項目, “B. 授業展開力” の能力群である「音楽的パフォーマンス」「言語的パフォーマンス」「子どもたちへの対応」の下位能力群16項目及び「学習者への評価」の合計21項目に関わるものであると筆者は考えている。

“A. 授業構想力” における10項目の能力のうち, 「学習者の実態把握」「単元計画の作成」など残る6項目と, “B. 授業展開力” における21項目の能力のうち「教具の活用」の下位能力群4項目については, 後期に実施する「保育内容の指導法」において育てることができるよう授業内容を構築したい。また “C. 授業評価力” における2項目の能力の育成については, 教育実習・保育実習の事後指導等を活用したい。今後は, 他の授業内容と音楽に関する資質・能力との関わりについて, 引き続き検証していきたい。

2. については, 「授業力評価スタンダード(音楽科)」による自己評価, 感想等の記述内容が拠りどころとなるであろう。「IV. 「幼児音楽」の授業内容の検証について」において述べたように, 今回, 再構築した授業内容については, 概ね適正であると考えている。ただ, 自己評価において「到達できず」としたものが, 少数ではあるが存在している。受講者全員が, 少なくとも段階1の目標に到達できるように実施方法を検討することが今後の課題である。

学部における教員養成の充実が, 中央教育審議会の諸部会等でいわれ始めて久しい。いわゆる大学全入時代を迎え, 教員を養成する大学においては, 教育の質を保証するシステムの再構築を迫られている

子どもの表現を導く支援を行う保育者に求められる資質・能力を育てるために, 「幼児音楽」及び「保育内容の指導法」のそれぞれ2単位15コマをさらにブラッシュアップする, という課題について継続的に取り組まなければならないと考えている。

※ 資料「授業力評価スタンダード(音楽科)」

参考文献

- 中央教育審議会(2006)『今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)』文部科学省
- 教員養成部会(2015)『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(中間まとめ)』文部科学省
- 三村真弓(2013)『音楽科教育実践演習をととした教科内容学と教科教育学の架橋』平成25年度日本教育大学協会全国音楽部門大学部会第38回全国大会
- 岡田知也(2014)「小学校教員養成における音楽に関する教育法科目の内容構築に関する研究(1)」『学校音楽教育研究 Vol.18』日本学校音楽教育実践学会, pp.266-267
- 岡田知也・桐山由香(2015)『子どもの表現を導く支援の在り方』全国大学音楽教育学会平成27年度第31回全国大会(下関大会)
- 岡田知也(2015)『小学校教員養成における音楽に関する教育法科目の内容構築に関する研究(1)』日本学校音楽教育実践学会第20回全国大会
- 長島真人(2009)「音楽科教員養成の構想と実践(1): 音楽科授業力評価スタンダードの開発と活用」『鳴門教育大学授業実践研究: 学部の授業改善をめざして Vol.8』鳴門教育大学, pp.6-9
- 長島真人(2009)「音楽教師に期待される資質・能力の広がり」と深まりー音楽科授業実践力評価スタンダードの構想ー」『学校音楽教育研究 Vol.13』日本学校音楽教育実践学会, pp.200-201
- 小林美実編(1975)『こどものうた200』チャイルド社
- 石丸由理(2005)『うごきのためのリトミック百科ピアノ曲集』ひかりのくに
- 吉富巧修・三村真弓編(2012)『幼児の音楽教育法ー美しい歌声をめざして』ふくろう出版
- 金指初恵(2009)「弾き歌いに関する一考察ー教育実習事前指導の観点からー」『埼玉学園大学紀要第9号(人間学部篇)』埼玉学園大学, p.206

「授業力評価スタンダード（音楽科）」（抜粋）

観点	段階	段階 1	段階 2	段階 3
A. 授業構想力				
1. 学習者の把握				
1) 学習者の実態把握		クラス全体の子どもの学習状況を把握し、学習課題を明確にすることができる。	子どもたち一人ひとりの学習状況を学習の記録に関わる客観的な情報に基づいて的確に把握し、学習課題を明確にすることができる。	子どもたちの学習生活環境や学力の習得状況に基づいて、子どもたち一人ひとりの学習状況を論理的に把握し、的確な学習課題を明確にすることができる。
2) 学習への構え・ルールづくり		子どもたちが既に習得している学習規律を理解し、これに基づいて指導を展開することができる。	子どもたちと教師によって展開されるコミュニケーションを実現させるために必要とされる学習規律を、子どもたちが納得できる方法で設定し、子どもたち一人ひとりの個性に基づいて活用することができる。	望ましい学習環境を維持していくために、子どもたちと相互にかかわり合いながら、協同的に学習規律を工夫し、子どもたちが主体的に学習規律を守り、修正していくことができるような学びの共同体を育てていくことができる。
2. 目標の分類と設定		子どもたちの学習状況をふまえながら、音楽に対する関心・意欲・態度と音楽の構造の知覚、音楽の美しさの感受、演奏や聴取の技能という観点から、学習目標を設定することができる。	学習指導要領や特定のカリキュラムと子どもたちの学習状況をふまえながら教材を吟味し、音楽に対する関心・意欲・態度と音楽の構造の知覚、音楽の美しさの感受、演奏と聴取の技能という観点から目標を分類し、学習評価の規準と基準を設定することができる。	学習指導要領や特定のカリキュラムをふまえると同時に、障害等を含む多様な子どもたちの学習状況や生活状況をふまえながら教材を吟味し、音楽に対する関心・意欲・態度と音楽の構造の知覚、音楽の美しさの感受、演奏と聴取の技能という観点から目標を分類し、学習評価の規準や基準を設定することができる。
3. 授業構成				
1) 教育内容の構成		学習指導要領や特定のカリキュラムと子どもたちの学習状況をふまえながら、子どもたちが教材を通して学ぶ内容を明確に把握することができる。	学習指導要領や特定のカリキュラムと子どもたちの学習状況をふまえながら、子どもたちが教材を通して学ぶ内容を学習の深まりと広がりという観点から位置づけることができる。	学習指導要領や特定のカリキュラムと子どもたちの学習状況をふまえると同時に、学校目標や学年目標をふまえながら、子どもたちが教材を通して学ぶ内容を学習の深まりと広がりという観点から構成することができる。
2) 教材の選択・構成		設定された目標と学習課題に基づいて、子どもたちの学習に適した教材を吟味し、選択・構成することができる。	設定された目標と学習課題に基づいて、子どもたちの学習に適した教材を吟味し、主教材と副教材という観点で教材を関係づけ、構成することができる。	設定された目標と学習課題に基づいて、子どもたちの学習に適した教材を吟味し、題材の中で子どもたちの探究活動が有効に展開されるように教材を編成することができる。
3) 授業過程の組織		音楽のゲシュタルト性をふまえながら、学習活動が音楽の全体的な把握から、分析的な探究、全体像のとらえ直し、という流れで授業過程を組織化することができる。	音楽のゲシュタルト性をふまえると同時に、音楽の知覚と感受という観点から学習活動を組織化し、子どもたちの学習状況に適した指導行為を組織化することができる。	題材レベルで子どもたちの学習活動が連続的に発展するような学習過程の組織化と教材の構造的編成を授業過程に具体化することができる。
4) 学習法・学習形態の選択・構成		学習課題に適した遊び活動や探究活動を選択し、子どもたちの学習状況と教材の特性にふさわしい学習形態を組織化することができる。	子どもたちの課題意識が活性化されていくように遊び活動や探究活動を選択し、協同的な探究活動が展開されるような学習形態を適切に組み合わせることができる。	題材レベルで歌唱、器楽、創作、鑑賞等の多様な学習活動を組み込み、課題追求が活性化されるような個別学習やグループ学習、一斉学習を適切に組み合わせ、組織化することができる。
4. 単元計画（授業計画）				
1) 単元（授業）計画の作成		前時の授業と次時の授業で扱われる学習課題の関連に基づいて、児童観や教材観、指導観を明確にし、授業計画を成文化することができる。	子どもたちの学習状況と教材の特性をふまえながら、課題意識の活性化を促す学習指導計画を成文化することができる。	子どもたちの学習状況と学習課題に基づいて題材設定の理由を明らかにし、ここで必要とされる学習活動や教材の意義を論理的に記述することができる。
2) 学習指導案の作成		実習指導教員の指導に基づいて学習目標を成文化し、具体的な学習指導過程と評価の手だてを的確に記述することができる	自分で把握することができた子ども観と教材観、指導観に基づいて学習目標を成文化し、具体的な学習指導過程と評価の手だてを的確に記述することができる。	題材レベルでの目標に基づいて、個々の授業目標の達成を目指した子どもたちの学習活動と教師の支援を具体的に記述することができる。

観点 \ 段階	段 階 1	段 階 2	段 階 3
3) 学習評価 計画の作成	授業過程における個々の場面で、 指導構想に関連した評価の観点を 明確に記述することができる。	観察法、実技試験法、質問紙法等 の手だてを活用しながら、学習指 導場面に適した評価の内容と方法 を記述することができる。	子どもたち自身の学習の振り返り と教師の指導行為の反省的な考察 のために活用できる評価シートや 録音・録画等の情報提供を活用し、 子どもたちの学習活動を活性化せ ると同時に、査定のための資料を 蓄積することができる。

観点 \ 段階	段 階 1	段 階 2	段 階 3
B. 授業展開力（授業構想力をふまえながら、授業実践の場で臨機に発揮される能力群）			
1. パフォーマンス			
1) 音楽的パフォーマンス			
① 範唱	教材となり得る歌唱曲にふさわしい拍節法とディクション（歌詞の発音法）に基づいて、歌唱教材を範唱することができる。	子どもたちの学習課題に適した範奏を工夫し、これによって子どもたちの探究活動を促すことができる。	子どもたちの学習課題に適した範唱を工夫し、これによって子どもたちの探究活動を促すことができると同時に、その吟味の方法と実際のスキルを他者に指導することができる。
② 範奏	教材となり得る楽曲にふさわしい拍節法に基づいて、範奏することができる。	子どもたちの学習課題に適した範奏を工夫し、これによって子どもたちの探究活動を促すことができる。	子どもたちの学習課題に適した範奏を工夫し、これによって子どもたちの探究活動を促すことができると同時に、その吟味の方法と実際のスキルを他者に指導することができる。
③ 伴奏	子どもたちの学習にふさわしい伴奏を選択、あるいは編曲し、楽曲全体の曲想にふさわしい伴奏をすることができる。	子どもたちの学習課題に適した伴奏を工夫し、これによって子どもたちの探究活動を促すことができる。	子どもたちの学習課題に適した伴奏を工夫し、これによって子どもたちの探究活動を促すことができると同時に、その吟味の方法と実際のスキルを他者に指導することができる。
④ 身体表現や指揮	子どもたちと音楽を分かち合うことが可能な身体表現や指揮を工夫し、適切に演じることができる。	子どもたちの学習課題に適した身体表現や指揮を工夫し、これらによって子どもたちの探究活動を促すことができる。	子どもたちの学習課題に適した身体表現や指揮を工夫し、これらによって子どもたちの探究活動を促すことができると同時に、その吟味の方法と実際のスキルを他者に指導することができる。
⑤ アインザッツ（合図）	子どもたちがスムーズに演奏することができるようなアインザッツ（合図）を演じることができる。	子どもたちの学習課題に適したアインザッツ（合図）を工夫し、これによって子どもたちの探究活動をスムーズに促すことができる。	子どもたちの学習課題に適したアインザッツ（合図）を工夫し、これによって子どもたちの探究活動をスムーズに促すことができると同時に、その吟味の方法と実際のスキルを他者に指導することができる。
2) 言語的パフォーマンス			
① 基礎的な発話、演技性（発音、スピード、ボリューム、間）	子どもたちが聴き取ることができるような発話を演じることができる。	子どもたちの学習の活性化を意図した明瞭な発音、スピード、ボリューム、間（沈黙）等が適切に演じられている。	子どもたちの学習の活性化を意図した明瞭な発音、スピード、ボリューム、間（沈黙）等が適切に演じられていると同時に、このような工夫を他者に指導することができる。
② 適切な語彙、説明、例話	子どもたちの学習状況にあった適切な語彙に注意が払われ、簡潔な説明や例話が演じられている。	音楽の探究を促す隠喩的な語彙や例話が適切な順番に紹介され、子どもたちの学習を活性化させることができる。	音楽の探究を促す隠喩的な語彙や例話が適切な順番に紹介され、子どもたちの学習を活性化させることができると同時に、このような工夫の根拠となる論理と実践の方法を他者に指導することができる。
③ 歌詞の範読	子どもたちが模倣することが可能な範読が演じられている。	楽曲の特性をふまえながら、歌唱表現の工夫にふさわしい範読が演じられている。	楽曲の特性をふまえながら、歌唱表現の工夫にふさわしい範読が演じられていると同時に、このような工夫の根拠となる論理と実践の方法を他者に指導することができる。
④ 発問	子どもたちが音楽の探究を展開していくことができるような問いかけや語りかけを行っている。	子どもたちの探究活動と呼び起こす発問群が準備され、子どもたちの学習状況に基づいて臨機に修正し、提示することができる。	子どもたちの探究活動と呼び起こす発問群が準備され、子どもたちの学習状況に基づいて臨機に修正し、提示できると同時に、発問の教授学的な意義を理解し、その特性と工夫の方法を他者に指導することができる。
⑤ 指示	子どもたちが誤認することのない指示を的確に演じている。	子どもたちの注意を集中させ、学習課題に適した指示を明確に演じている。	子どもたちの注意を集中させ、学習課題に適した指示を明確に演じていると同時に、指示の教授学的な意義を理解し、その特性と工夫の方法を他者に指導することができる。

観点 \ 段階	段 階 1	段 階 2	段 階 3
⑥司会、助言、応答	子どもたちと相互に音楽を分かち合うために、言葉による指導を展開している。	子どもたちの一人ひとりの発言や音楽的表現を的確に把握し、学習集団としての分かち合いが円滑に行われていくように司会や助言、応答を演じている。	子どもたちの一人ひとりの発言や音楽的表現を的確に把握し、学習集団としての分かち合いが円滑に行われていくように司会や助言、応答を演じていると同時に、音楽によるコミュニケーションの特性とその活性化の方法を他者に指導することができる。
3) 子どもたちへの対応			
① 身体的ジェスチャー、表情	子どもたちと共に音楽の授業を過ごすために必要な身体的ジェスチャーや表情を工夫している。	子どもたちの学習状況を的確に把握し、子どもたちが安心して学習に参加することができるような身体的ジェスチャー（身振り）や表情を演じている。	子どもたちの学習状況を的確に把握し、子どもたちが安心して学習に参加することができるような身体的ジェスチャー（身振り）や表情を演じていると同時に、その意義や配慮と工夫を他者に指導することができる。
②視線（アイコンタクト）	教室のすべての子どもたちに視線（アイコンタクト）が向けられている。	子どもたちの注意力や集中力、安心感を呼び起こすような視線（アイコンタクト）を演じている。	子どもたちの注意力や集中力、安心感を呼び起こすような視線（アイコンタクト）を演じていると同時に、その意義や配慮と工夫を他者に指導することができる。
③教室での位置取り	すべての子どもたちが学習可能な位置に立って授業を展開している。	個々の学習形態に適した位置に立ち、子どもたちとの分かち合いがスムーズに行われるように配慮している。	個々の学習形態に適した位置に立ち、子どもたちとの分かち合いがスムーズに行われるように配慮していると同時に、その意義や配慮と工夫を他者に指導することができる。
④予想外の子どもたちの発言や音楽的表現への対応	受容的な態度で子どもの発言や音楽的表現を受けとめている。	子どもの考えの根拠を確認し、子どもの学習状況に適した説明や補足、修正、言い換えを臨機に行うことができる。	子どもの考えの根拠を確認し、子どもの学習状況に適した説明や補足、修正、言い換えを臨機に行うことができると同時に、子どもの不安、動揺を納め、安全な雰囲気作りへの対処を臨機に行っている。
⑤ハプニング（突発事故）への対応	ハプニング（突発事故）に対して冷静に立ち向かっている。	子どもの不安、動揺を納め、安全な雰囲気作りへの対処を臨機に行っている。	子どもの不安、動揺を納め、安全な雰囲気作りへの対処を臨機に行っている。
2. 教具の活用			
1) 板書			
①内容	板書の計画や板書事項の工夫が適正に行われている。	子どもたちの学習活動に必要とされる言語情報や楽譜が的確に配置された板書内容を適正に提示している。	子どもたちの学習活動に必要とされる言語情報や楽譜が的確に配置された板書内容を適正に提示していると同時に、その工夫の方法を他者に指導することができる。
②技能	板書事項と口頭による説明や音楽的表現を分けて実行している。	子どもたちの探究活動を触発するような順序で、範唱や発話を伴いながら情報を提示している。	子どもたちの探究活動を触発するような順序で、範唱や発話を伴いながら情報を提示していると同時に、その工夫の方法を他者に指導することができる。
2) 教育機器・資料			
①教育機器の活用スキル	子どもたちが容易に情報を得ることができるような伴奏楽器や音響機器、映像機器等が選択され、スムーズに活用されている。	子どもたちの学習活動に必要とされる伴奏楽器や音響機器、映像機器等が選択され、子どもたちの探究活動を触発するような順序で活用されている。	子どもたちの学習活動に必要とされる伴奏楽器や音響機器、映像機器等が選択され、子どもたちの探究活動を触発するような順序で活用されていると同時に、それらの意義と方法について他者に指導することができる。
②資料の活用スキル	子どもたちが容易に情報を得ることができるような視聴覚情報や言語情報、楽譜等が選択され、スムーズに活用されている。	子どもたちの学習活動に必要とされる視聴覚情報や言語情報、楽譜等が選択され、子どもたちの探究活動を触発するような順序で提供されている。	子どもたちの学習活動に必要とされる視聴覚情報や言語情報、楽譜等が選択され、子どもたちの探究活動を触発するような順序で提供されていると同時に、それらの意義と方法について他者に指導することができる。
3. 学習者への評価	音楽に対する関心・意欲・態度、音楽の美しさの感受と表現の工夫、音楽の構造の知覚という観点から評価の内容を設定し、適切な方法で評価活動を行っている。	学習指導過程立案において明確化された評価の観点に基づいて、整合性のある評価活動を実施している。	学習指導過程立案において明確化された評価の観点に基づいて、整合性のある評価活動を実施していると同時に、子どもたちの学習状況に適した評価の内容と方法を他者に指導することができる。